

## 近代の逆說的象徴

—— ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラ ——

ハンス ユーゲン・マルクス

ミランドラ伯爵ジョヴァンニ・ピコはわずか9年間の文筆活動でヨーロッパ各地に名声を馳せる中、1494年11月17日、31歳の生涯を閉じたり。

---

### 略記

- Farmer S. A. FARMER, *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses (1486). The Evolution of Traditional Religious and Philosophical Systems*, Tempe 1998.
- Opera E. GARIN (ed.), *Johannes Picus Mirandolanus: Opera Omnia I-II*, Torino 1971.
- Scritti Id., *G. Pico della Mirandola: De hominis dignitate, Hetaplus, De ente et uno e scritti varii*, Firenze 1942.
- VG L. VALKE/R. GALIBOIS, *Le périple intellectuel de Jean Pic de la Mirandole suivi du Discours de la dignité de l'homme et du traité L'être et l'un*, Sherbrooke 1994.

上記略記以外は S. SCHWERTER, *Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis*, Berlin-New York 1994 に依る。

- 1) E. GARIN, *Giovanni Pico della Mirandola: Vita e dottrina*, Firenze 1937; id., *Giovanni Pico della Mirandola*, Parma 1963; G. DI NAPOLI, *Giovanni Pico della Mirandola e la problematica dottrinale del suo tempo*, Roma 1965; H. de LUBAC, *Jean Pic de la Mirandole*, Paris 1974; D. BAKER, *Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494. Sein Leben und sein Werk*, Dornach 1983; H. REINHARD, *Freiheit zu Gott. Der Grundgedanke des Systematikers Giovanni Pico della Mirandola*, Weinheim 1989; FROULIER, *Jean Pic de la Mirandole (1463-1494). Humaniste, philosophe et théologien*, Genève 1989; G. A. RASPANTI, *Filosofia, teologia, religione. L'unità della visione in Giovanni Pico della Mirandola*, Palermo 1991; P. O. KRISTELLER, *Studies in Renaissance Thought and Letters* 3, Roma 1993, 227-304. 佐藤産夫著『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』(有信社・1985年)203-265頁, 拙論「人間の尊厳—ルネサンスの貢献」『南山神学』(第23号・1999年)280-286頁。

マルシリオ・フィチーノはピコの甥ジャンフランチェスコに送った手紙で、親しい友人でも鋭いライバルでもあった後輩の夭折をこう偲んでいる。

「神はジョヴァンニ・ピコに知能と肉体のあらゆる才能を余すところなくお与えになったように見えたのですが、もう少し長い生涯をお許しになったらよかったです。しかしこの点においても御摂理は非難されるべきではないでしょう。なぜなら、神が彼を最短の期間で最善へとお導きになったのなら、より高い、より善い所へ進行しえなかったかもしれないからです。」<sup>2)</sup>

同時代の知識人はいっそう高くピコの天才を称賛した<sup>3)</sup>、その後もピコを彗星のごとく現れた稀有な天才とみなすのが通常であった。ところが、そもそもルネサンスという名称を創ったヤコブ・ブルクハルトが『人間の尊厳について』の講演を「あの優れた時代の最も崇高な遺産の一つ」<sup>4)</sup>と評価して以来、ピコはその時代の象徴に生まれ変わった。本稿ではまずブルクハルト以来のピコ像についての賛否論を確認し、引き続いて文筆活動期間および著作集公刊までの経緯を紹介したい。最近の批評に反してあえて近代の象徴といったピコ像にこだわる理由を詳述するためにはその著作にもっとメスを入れる必要があろうが、これは別の機会に譲ることにする。

## 1. ブルクハルト以来のピコ像

前世紀 30 年代のファシズムやその他の全体主義がはびこる中、『人間の尊厳について』の講演（以下講演）<sup>5)</sup>とともにピコの著作はますます注目を

---

2) Opera I, 406. 本音については注 109 参照。また、フィチーノについて、佐藤上掲書 102-118 頁、上掲拙論 275-290 頁参照。

3) Opera I, 407-409 参照。

4) J. BURCKHARDT, *Civilisation of the Renaissance in Italy*, London 1929, 351-352.

集め、1935年、ネスカ・ロブはピコを「おそらく誰よりも彼こそその時代の生ける象徴であり、その広範にわたる知的好奇心、寛容な情熱……を体現する者である」<sup>6)</sup>と位置づけた。2年後、ピコの生涯と思想を詳述する単行本<sup>7)</sup>を著わしたエウジェニオ・ガリンは現在もなおルネサンス研究の権威で、1994年にミランドラで開かれた、ピコの没後500周年大会の開会講演で30年代の緊張した思潮を振り返って<sup>8)</sup>、種々多様な哲学、宗教思想を互いに和解させ、その試みを可能にする条件として、人間の自由を力説するピコの思想が当時特別示唆に富んでいた、と述べた<sup>9)</sup>。

1963年、ピコ生誕500年祭にミランドラで開かれた大会でもやはりガリンは開会講演を行っており、次の5点を指摘した。(一)ピコは短期間で膨大な文書を残したが、その多くを将来体系づけるべく未完成のまま残した。(二)こうした事情に加えてピコはほとんどの文書を20歳代の青年として書いた。そういうわけで各文書の整備度のみならず成熟度も異なっている。(三)文筆活動のはじめから終わりまでピコは種々の論争に巻き込まれていた。したがって各文書の趣旨を正しく評価するためには執筆当時何が問題であったかを知らなければならない。(四)ピコは膨大な資料を引用するが、各引用がそのままピコ自身の見解と一致するとは限らない。(五)ピコは多くのテーマを扱うが、どれがピコ自身にとって中心だったかは容易に言えない

5) Opera I, 313-331=VG 185-235. ピコの存命中、無題名の原稿は一部の友人にしか知られていなかった。執筆の途中(1486年11月12日)ジローラモ・ベニヴィエーニに送った手紙が示唆するように、ピコ自身が題名をつけたならば『平和について』または『哲学の称賛のために』を選んだであろう(Opera II, 387)。1496年、ポローニャで叔父の著作集を活字印刷で公刊したジャンフランチェスコが『雄弁な講演』と題した。このポローニャ版は1504年、ストラズブルクで間違いだらけで再印刷され、講演も『人間の尊厳について』と改題された。

6) N. ROBB, *Neoplatonism of the Italian Renaissance*, London 1935, 61.

7) 上掲注1参照。

8) E. GARIN, "Prolosure," G. C. CAFRAGNINI (ed.), *Giovanni Pico della Mirandola* (Convegno internazionale di studi nel cinquecentesimo anniversario della morte), Firenze 1997, XLV. LI.

9) E. GARIN, op. cit. (1937), 55-72.

い<sup>10)</sup>。ところが2000年の死までガリンとルネサンス研究の主導権を競ったポール＝オスカル・クリステラは、無限の自由こそピコの中心的なテーマであるとずっと主張してきた<sup>11)</sup>。クリステラの解釈を継承する研究者も多い<sup>12)</sup>。

無限の自由との関連でピコがマジックとカバラに絶大な関心を寄せたことに注目する研究もある。ロンドンのヴァルブルク研究所がその拠点である。1964年、同研究所員フランシス・イエイツは『ジョルダノ・ブルーノとヘルメス伝承』を著わしたが、その中のピコに関わる第5章をすでに前年の生誕500年祭で発表していた<sup>13)</sup>。女史によれば、フィチーノのヘルメス文書ラテン語訳(1463年)はマジックを中世魔術の悪評から解放し、ピコはこれにカバラを加えて、人間がほしいままに天界から霊的力を呼び寄せることができるシステムを提供し、それを自由に活用しようとする姿勢を人間の尊厳を高めることとして称賛した。そういうわけで、歴史におけるピコの役割はいくら高く評価しても過大評価にはならない。なぜなら、はじめて西欧人にまったく新しい地位を表現したのは彼であったからである。それはマジックとカバラの両方を活用することによって世界に働きかけ、自らの運命を科学によって管理すべきマジシャンとしての地位であっ

---

10) Id., "Le interpretazioni del pensiero di Giovanni Pico," *L'opera e il pensiero di Giovanni Pico della Mirandola nella storia dell'umanesimo I*, Firenze 1965, 6-8.

11) P. O. KRISTELLER, "Giovanni Pico della Mirandola and His Sources," *L'opera*, op. cit. 81. 84; id., *Eight Philosophers of the Italian Renaissance*, Stanford 1964, 67; id., *Renaissance Thought II: Papers on Humanism and the Arts*, New York 1972, 13-17.

12) A. BUCK, "Giovanni Pico della Mirandola e l'antropologia dell'umanesimo italiano," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 7-10; M. J. B. ALLEN, "Cultura Hominis: Giovanni Pico, Marsilio Ficino and the Idea of Man," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 178-179. 186-192; E. COLOMER, "Microcosmo e macrocosmo fra il primo e il secondo umanesimo," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 292-296.

13) F. YATES, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, London 1964; ead., "Giovanni Pico della Mirandola and Magic," *L'opera*, op. cit. 159-203.

た<sup>14)</sup>。

イエイツの解釈では、ピコはただルネサンス期の象徴であるだけでなく、まさに近代の象徴ともなっている。はじめてウィリアム・クレイヴェンはこうした解釈に異議を唱えた。しかし各説を論駁するあまり、その研究からピコの、実際に暑い宗教心のほか何も伝わってこない<sup>15)</sup>。クレイヴェンと同様、ルイ・ヴァルケも時代の象徴というブルクハルト以来のピコ像を拒否している<sup>16)</sup>。そのため、1485年の夏にピコとエルモラオ・バルバロの間に交わされた論争を重視しているが、実際示唆に富む。

ペトラルカ以来、スコラ学の無味乾燥な概念構成に豊富な雄弁術を対比させることが人文主義者の誇りであった。こうした立場からバルバロが「野蛮人の哲学」を批判したと聞いて、ピコは文体に対する内容の優位、それゆえ人文主義の雄弁術に対するスコラ学の優位を力説する長文の手紙を送った<sup>17)</sup>。これに応じてバルバロは手紙の優れた雄弁術を称賛したうえ、ピコが自ら文体重視という人文主義の理想を掲げる一方、その最大の敵である「野蛮人の味方」をしている逆説を皮肉たっぷりに返事してきた<sup>18)</sup>。

ヴァルケによれば、逆説はバルバロが考えた以上のところまでに及んでいる。ロレンツォ・デ・メディチをはじめ有力、優秀な人文主義者と親しく交際する一方、終生彼らの思想と距離を保ち、さらに当時のあらゆる流行に抵抗した。これこそピコの逆説であった。もう一点も通常の意味における「近代」の象徴に合わない。それは活動に観想を優先させたというこ

14) Ead., *Giordano Bruno*, op. cit. 116. イエイツのテーゼは今もなお有力だが、最近になってはじめて徹底的に非難された(Farmer 115-132)。

15) W. C. CRAVEN, *Giovanni Pico della Mirandola. Symbol of His Age*, Genève 1981. イエイツについて 84-94 頁参照。

16) L. VALKE, “〈Homo contemplator〉: il doppio distacco dell’umanesimo pichiano,” G. TARUGI (ed.), *Homo sapiens, homo humanus 1: La cultura italiana tra il passato ed il presente in un disegno di pace universale*, Firenze 1990, 233-245.

17) Opera I, 351-358.

18) Opera I, 394. 種々異なる解釈について W. C. CRAVEN, op. cit. 38-39 参照。

とである。優れた才能に恵まれ、社会的地位もあったにもかかわらず、終生公職に就くことを拒否したのもそのためであった<sup>19)</sup>。

筆者もピコの著作をよりよく知るにつれて、観想や解脱こそ彼の最大関心事であったことを確信するようになった。と同時にガリンが40年も前に指摘したとおり、ピコを思想を正當に評価するためには、彼が置かれていた論争の状況をもっと知らなければならないとも痛感した。本稿では特に論争の状況の解明に焦点を当てたい。

## 2. 公開討論の企画

前述したバルバロとの論争を経て、ピコは当時スコラ学のメッカであったパリ大学に約半年留学した<sup>20)</sup>。パリに限らず各大学で頻繁に公開討論を行なうことは13世紀以来の慣行であり、当時は一層盛んになっていた。ピコについては1479年9月フェラーラで開かれた公開討論の席で演壇に立つ哲学・神学者レオナルド・ノガローラと議論したとき、観客を感心させたとも伝えられている<sup>21)</sup>。そのときピコはまだ16歳で、その後6年間の哲学や神学の学習を経てパリに赴いたことを考えれば、そこで開かれた各種の公開討論にも参加し、活発に意見を述べたことだろう。しかしまだ自ら演壇に立って自分の見識を述べ、質疑に応答することはなかった。パリではついにその場を設けることを決意し、ローマを会場に選んだ<sup>22)</sup>。ところが

---

19) 友人アンドレア・コルネオはピコに哲学研究の停止と公職への就任を勧めたが、ピコは1486年10月15日の手紙で、真理の探究と徳の鍛錬が自らの使命だと力説し (Opera I, 377), またその後執筆したと思われる講演第2部のはじめにもおそらく友人の叱責を念頭に同様な見解を述べている (Opera I, 321-322=VG 204-205)。この話は短文講演の中に見られないので同年11月10日以降に書かれたはずである (注28, 32参照)。

20) これまでの教育については、上掲拙論280-281頁参照。

21) G. FIORAVANTI, "Pico e l'ambiente Ferrarese," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 159-160. 会場が大学であったかどうかは分からない。なぜなら資料はその場所を知らせていないし、大学以外の場でも頻繁に公開討論が開催されていたからである (Farmer 4-5)。

その会場選択が禍をもたらすことになった。

1486年3月、ピコは一時フィレンツェに戻り、同年5月8日、書記や騎馬隊を伴ってローマに出発した。しかし旅は凶兆で始まった。ピコはその美貌で有名だったし、それまでも女性と関係をもっていた。事前にやりとりがあったかどうか分からないが、旅の二日目、アレッツォ城外の宿屋に宿泊した翌日、税吏ジュリアーノ・ディ・マリオッティ・デ・メディチの婚約者マルガリータを連れて出発した<sup>23)</sup>。婚約相手をはじめ約200名のアレッツォ市民が一行を追い、戦いの末ピコ側は18名もの命を落とし、ピコ自身も大怪我をした。婚約者を連れ戻した相手がロレンツォ・デ・メディチに送った報告書には、マルゲリータが拉致されたと書いてあるが、具体的な措置は何一つ要求されていない<sup>24)</sup>。役人の書いたもう一通の報告書には「あの美男子にほれて、みさかいもなくなって自主的に乗馬した」と明言されている<sup>25)</sup>。天から落とされた反逆天使を引き合いに出す形で、もう一人の関係者は「あの日には、かつてルチフェールに起こった以上に名誉や人望が転倒した」と報告を締めくくっている<sup>26)</sup>。噂はたちまち広がり、ピコは友人の非難にも応えなければならなかった<sup>27)</sup>。

放免の条件であったか分からないが、一行がペルージャに着いたとき、そこに滞在することになった。10月下旬あるいは11月上旬、ピコはペルー

---

22) 1338年ベトラルカはカルタゴ征服者スキッピオを称える叙事詩『アフリカ』を著し、パリ大学からの申し出を蹴って、桂冠詩人に列せられる場所としてローマ大学を選んだ。この思い出がピコの選択に影響したのだろう。

23) 翌日、ロレンツォ・デ・メディチに送られた報告書は3通残っている (Opera II, 289-291)。役人の報告書でマルガリータは税吏の「妻」(la moglie)とされているが、本人は「私の女」(mia donna)と記している。既婚婦人の拉致といった犯罪の重大性を考えても、無処罰で済んだはずもないので二人は婚約関係であったのだろう (P. F. GRENDLER (ed.), *Encyclopedia of the Renaissance* 5, New York, 1999, 16)。

24) Opera II, 290.

25) Opera II, 291.

26) Opera II, 290.

27) ピコがコルネオに送った手紙(注19)の背景にはこのスキャンダルがあった。実際ピコは手紙の中で深い反省を表示している (Opera I, 378)。

ジャ城内から郊外のラ・フラッタに移った<sup>28)</sup>。すでにペルージャでは公開討論のため 900 提題をまとめ<sup>29)</sup>、900 にした理由を友人ジローラモ・ベニヴィエーニに送った手紙でこう説明している。

「公開の席で討論する提題は君が僕のもとを去った時点で 700 題で完了していた。君が去ってから 900 題にまで増加、前進した。そして終止符を打たなかったなら 1000 題までも上がっただろう。しかしこの神秘的な数字に止めてよいと考えた。それというのも、数字についての自説が正しければ、燃え上がった魂が瞑想の熱狂によって自己に回帰することを象徴する数字だからである。」<sup>30)</sup>

瞑想ないし観想による自己への回帰とそれによる神との一致は新プラトン主義とキリスト教的神秘主義に共通のテーマであり、ピコはすでにこの時点で、新プラトン主義的書物に加えてディオニシオス文書を吸収していた<sup>31)</sup>。公開討論を開始するべき講演の原稿もペルージャで書いた。これが『人間の尊厳について』のもととなった。しかしこれも後で拡張された。その理由のひとつをピコはベニヴィエーニへの手紙でこう述べている。

「君に送るこの文書をも講演に追加した。毎日かならず福音書の箇所を読むことを決意していたので、君が去った翌日にキリストのこれらの言葉に目が留まった。『私は平和をあなた方に残し、私の平和をあなた方に与える』[ヨハ 14 : 27]。魂のある種の興奮で私はすぐに哲学の称賛のため、何か平和のため、口述した。しばしば書記の手が追いつ

---

28) コルネオへの手紙(注 19)がペルージャで書かれたのに対して、1486年11月10日のベニヴィエーニともう一人の友人(名前不明)への手紙はラ・フラッタから発送されている(Opera I, 382. 384-386)。

29) Farmer 210-553. これは最新の校訂版で英語訳も注解もついており、900 提題の構造を示す一覧表(204-207 頁)がある。概説(1-193 頁)も大変役立つ。

30) Opera II, 387.



かないほどの速さで。」<sup>32)</sup>

さて、公刊後大問題になった 900 提題は歴史における諸学派についての提題 (402 題) と自分の見解による提題 (498 題) の 2 部に分かれており、第 1 部は中世のスコラ学から始まりアリストテレスとプラトンの各派を経て、当時は特別注目されていた「古代神学」(ラ *theologia prisca*) まで進む。これにフィチーノはピタゴラス派、カルデア神学者<sup>33)</sup>、ヘルメス文書を数えていたが、ピコはさらにカバラを付け加え、こうして律法のほかに神がモーセに与えた秘密の啓示を第 1 部全体の頂点に据えた。カバラは伝承

31) 近代に入ってから著者は偽ディオニシオスと呼ばれるようになった。この名称は価値判断を含むので、最近増えているディオニシオス文書とする。ディオニシオスという名では三人の人物が重なる。一人はアテナイでパウロの説教を聞いてその後についていったアレオパゴスの議員ディオニシオス (使 17:34 参照)。もう一人は皇帝デキウス (249-251 在位) が起こした迫害のときに殉教の死をとげたバリの司教であり、その遺骨は中世においてまさにフランス王国の中心地であった聖ディー修道院に納められている。第三番目の人物は 6 世紀 20 年代以来知られているディオニシオス文書の著者である。一箇所だけで匿名の覆いをはずしてディオニシオスと自称している (Ep. 7, 3=PTS 36, 170:4=PG 3, 1081C)。文書はパウロの名で知られている牧会書簡の受取人ティモテオスへの秘儀伝授として書かれており、著者自ら新約聖書成立同時代人の印象を与えようと意図している。著者はアンティオキアのセヴェロスの率いる穏健な単性論派に所属しており、シリアの西部あるいはコンスタンティノポリスのシリア人共同体で活躍していたとみるのが現在研究者の合意である。フェルト屋ベトロスと特定する仮説 (U. RIEDINGER, "Petros der Walker von Antiocheia als Verfasser der pseudodionysischen Schriften," ZKG 75 [1964] 146-152; TRE 2, 149-153) はある程度まで説得的ではあるが、広くは受け入れられていない (A. M. RITTER, *Pseudo-Dionysios Areopagita: Über die mystische Theologie und Briefe*, Stuttgart 1994, 4-19; VG 22-23)。当時の状況については拙論「自立主体の発見—古代キリスト教の遺産—」『南山神学』(第 24 号・2000 年) 81-85, 94-98 頁参照。ディオニシオス文書がピコの時代まで絶大な権威をもっていたのは、著者がパウロの弟子およびフランス教会の創始者とみなされたためであった。著者は大いに新プラトン主義後期の代表者プロクロスを利用している点で、当然新プラトン主義の発想を用いているが、ニュッサのグレゴリオス等の場合と同様に、思想の核心はキリスト教的である。ここで押さえておかなければならないのは、ピコにとっては新プラトン主義の伝承がまさにディオニシオス文書にさかのぼり、プラトン自身との違いもこうした「キリスト教的影響」によるものだ、ということである。

または口承を意味し、ピコはその起源をこう説き明かす。

「モーセは五書として文書の形で後代のために残した律法のみならず、より秘密で真実の注解をも山上で神から受けた。しかし神が彼にこう命じた。律法は民に公表すべきだが、律法の注解を文書で残してはならず、一般に向けて知らせてもならない。むしろヨシュアだけに、そしてヨシュアがその後を継ぐ大祭司に守秘義務のもとに伝えるべきである、と。[律法の]単純な物語でときには神の権能を、ときには悪い者にはその怒りを、善い者にはその優しさを、すべての者にはその正義が知らされ、神の有益な戒めと真実の宗教の祭儀が整備されることで十分であった。しかし律法の表皮とことばの粗い装いのもとに隠れている至高にして、神聖の秘儀を民に露わにすることは、犬に聖なるものを与え、豚の群れの中に真珠をばらまく [マタ 7 : 6] ことに他ならない。」<sup>34)</sup>

---

32) Opera II, 387. ピコが以前ベニヴェーニに渡した原稿はガリンが発見した短文の講演と一致するであろう (Opera II, 219-228)。ピコが口述した文書は講演の平和賛歌 (Opera I, 318=VG 195-196) にあたるであろう。

33) 古代エジプトのゾロアスタ注解者とみなされた。ゾロアスタに帰された託言群は新プラトン主義的著作から抜粋されたもので、当時二つの託言集が知られていた。一つは 11 世紀の、百科全書的知識の所有者と言われたコンスタンティーノス・ブセロスのもので、もう一つはフィレンツェ公会議(1438, 39年)に参加後フィレンツェに残ったプレートン(本名:ゲオルギオス・ゲミストス)のものであった。フィチーノは 1484 年、プレートン版をラテン語に翻訳したが、ピコはベルージャからフィチーノに送った手紙でアラム語原文を手に入れたと伝え、これは「誤りや欠落の多い」プレートン版とは対照的に「完全で絶対的」であると主張する (Opera I, 367)。実際ピコが提題に入れた託言はブセロス版とプレートン版にない題材を提供している (Farmer 486-493)。ピコのいうアラム語の文書は残っていないので、17 世紀までその性質等について活発な議論が交わされた。おそらく提題作成中にピコのために膨大なカバラ資料をラテン語に訳したフラビウス・ミトリダーテスの偽作であったろう (C. WIRSZUBSKI, *Pico della Mirandola's Encounter With Jewish Mysticism*, Cambridge Ms. 1989, 241-244; Farmer 487)。

34) Opera I, 328=VG 220-221.

引き続いてピコは、ピタゴラスはじめ古代哲学者も、イエスやパウロも、同様に教えの秘密の部分と公開の部分とを区別したと述べたうえ、それまで口承で伝えられた啓示がついに文書化されたことを、バビロン捕囚後の出来事としてこう説明する。

「当時教会の頭だったエズラは……イスラエル人の追放、殺戮、避難、捕囚のゆえに諸教説を人から人へ伝えるという先祖によって定められた慣行が将来守られないこと、こうして彼らに神から委ねられた天上の教えの秘儀がいつか失われること、さらにはその諸注解に助けられていなければ秘儀の記憶を長く続けることができないことが分かった。それゆえ、当時残っていた知恵者を召集し、ひとり一人が律法の秘儀について記憶していることを述べ、これを書記の手で70冊——ちょうどそれくらいの知恵者が集会にいた——に編集することを決意した。」<sup>35)</sup>

ピコが言うとおりに、口から耳に直接伝授されたと言われた秘儀を伝える一連の文書は古代異教、ユダヤ教のみならず古代キリスト教にも知られていた。しかし、カバラの現行体系ははじめて13世紀のスペインでまとめられた。直接の狙いはアリストテレス哲学の権威に対して啓示独自の権威を守ることであった。実際、現行体系の礎を据えたのはアリストテレス哲学に精通していたマイモニデスであったし、イタリアに伝わったカバラをまとめたのもその門弟アブラハム・アブラフィアであった<sup>36)</sup>。ディオニシオス文書のそれと同様にカバラの真実の由来をピコは知らなかったのも、カバ

35) Opera I, 329=VG 222. -

36) C. WIRSZUBSKI, op. cit. 84-99. 当時のイタリアにおけるカバラについて F. LELLI, "Yohanan Alemanno, Giovanni Pico della Mirandola e la cultura ebraica italiana del XV secolo," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 303-326 参照。また、ピコのカバラ理解については B. P. COPENHAVER, "L'occulto in Pico," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 213-236 参照。

ラは彼にとって最古でかつ神自身に一番近い「古代神学」であった。

900 提題第 1 部の段取りをみると、くい違いの多いラテン・アラビア系中世哲学から基本的にはプラトンかアリストテレスどちらかの影響下にある古代哲学を経由して、詩的表現で同一の秘儀を解く「古代神学」にさかのぼることが分かる。しかも「古代神学」の中でもカバラが最古に位置づけられている。900 提題第 2 部も同様に構成されており、ここではカバラに関する最後の提題群に「キリスト教を最も確認する……カバラの諸提題」<sup>37)</sup>という題がついている。これだけでも 900 提題の趣旨がうかがわれる。すなわち、純粹哲学的思考のレベルで種々多様な見解があってよいのだが、信仰のレベルではイエス・キリストが神と人との間の唯一の仲介者である。

信仰と理性との、または、神学と哲学との区別をピコはパドヴァ大学で勉強した頃アヴェロエス流アリストテレス哲学者エリア・デ・メディゴに学び、終生保持した。エリアはクレータ島生まれのユダヤ人でピコを指導するまで、著作のほとんどはヘブライ語で書いていた。ピコの依頼でアヴェロエス注解はじめ多数の著作をラテン語に翻訳した。根本主張は次の三つである。(一)アリストテレスはその後に来たすべての哲学者の父だ。(二)アヴェロエスはアリストテレスを一番正確に理解した。(三)たとえ信仰に矛盾するものであっても哲学上のすべての洞察を真剣に受け止めなければならない。もちろん三番目はアヴェロエスの根本主張でもあった<sup>38)</sup>。こうしてピコにとって信仰のレベルで聖書に加えてカバラが最も確実な拠りどころとなった。

以上のようにピコははじめてキリスト教の世界にカバラを紹介して、18 世紀までキリスト教的カバラの発展に絶大な影響を及ぼした<sup>39)</sup>。提題の執筆にあたって、ピコはカバラの文書を自分のためにラテン語に翻訳してく

37) Farmer 516.

38) E. P. MAHONY, "Giovanni Pico della Mirandola and Elia del Medigo, Nicoletto Vernia and Agostino Nifo," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 128-137; L. VALKE, "Giovanni Pico della Mirandola e il ritorno ad Aristotele," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 345-348.

れたフラビウス・ミトリダーテスに完全に依存していたが<sup>40)</sup>、しかし遅くとも1486年の終わり頃にはかなりの程度までヘブライ語をマスターしていた。ラ・フラッタから送った手紙でピコはフィチーノにこう報告している。

「一ヶ月昼も夜もヘブライ語を勉強した後、アラビア語とアラム語に専念してきました。この二つではヘブライ語より進歩が遅いです。まだまだ称賛には値しないのですが、ヘブライ語でなら咎なしに手紙くらは口述できます。」<sup>41)</sup>

900 提題の印刷は1486年12月7日に完了し、各大学に送られた。討論の開会が翌年1月6日以降に予定されていた。最後の頁を飾る開催通知はこうなっている。「イタリアの果てからでもいい、哲学者あるいは神学者で討論するためにローマに来ることを望む人ならば、その誰にも旅費を自ら負担すると討論予定者は約束する」<sup>42)</sup>。

---

39) G. SCHOLEM, "Zur Geschichte der Anfänge der christlichen Kabala," *Essays Presented to Leo Baeck*, London 1954, 158-193.

40) ピコ蔵書の大部分はヴァチカン図書館に収められている。ミトリダーテス翻訳もここにあり、3000枚に及んでいる (C. WIRSZUBSKI, *op. cit.* 4-6. 69-70. 73-114)。カバラに関する提題の資料となっている文書について、同書9-65頁参照。

41) Opera I, 367. 日付がついていないがラ・フラッタから発送されているので11月上旬から12月下旬の間ということになる。短文講演はベルージュで書かれたので10月中旬以前の情報を提供している。そこではヘブライ語について、ミトリダーテス「の指導のもと、いま汗を流し始めた」と書いてある (Opera II, 239)。そういうわけで短文講演を書いた頃ヘブライ語を本格的に学習し始めたのだろう。提題の数を一時700題に止めてあった以前に、開会講演の執筆にとりかかったとは考えにくいので、ヘブライ語の学習は9月以降のことになる。

42) Farmer 552. 提題の全部冊の処分を命じる小勅書の中でイノケンティウス8世は提題がローマで「いろいろの公共の場に展示された」こと、また「世界の他の地域でも公刊された」ことを非難した (Scritti 63)。1497年夏の時点ではイタリア以外の地域にも送られたかは分からない。

### 3. 教皇庁との衝突

提題の公刊は相当な反響を呼んだ。ピコ自身主要な批判を三つに分けて紹介している。まず公開討論自体の意義を拒否する声が上がった。当時かなり流行していたものの、ピコの野心的な900にも及ぶ提題は「才能と学識のひけらかし」と非難されたことは想像に難くない。第二・第三点をピコはこうまとめる。

「またこんな人々もいます。確かにこの種の慣行を非難しませんが、しかし私がこの年齢すなわち現在24歳で、高尚なキリスト教の神学の諸神秘について、哲学の深遠な諸問題について、知られざる学問諸領域について、最も誉れ高き都市で最も高い学術を身に付けた人々の最も幅広い集まりで、しかも教皇庁の会議場で、あえて討論を企画したことをどうしても私に認めません。別の人々は私に討論することを認めますが、900もの提題に関して討論することを認めようとはしません。彼らは余計にかつ野心に満ちて、さらには能力を越えてそれがなされると非難します。」<sup>43)</sup>

公式の反応<sup>44)</sup> ははじめて1487年2月20日に小勅書の形で現れた<sup>45)</sup>。この中でイノケンティウス8世は提題公刊以降「権威ある大勢の神学者の間に発生、否、勃発した当惑」に言及したうえ、問題視されている提題を(—

---

43) Opera I, 322-323=VG 206.

44) L. DOREZ/L. THUESNE, *Pic de la Mirandola et France*, Paris 1897, 114-146=Opera II, 421-429. ここには1487年2月20日から同年7月31日まで、ピコの件で教皇庁がとった措置の資料が収まっている。以下Dorezとし、括弧の中でピコ著作集の頁数を記す。筆者に知られている限り、7月31日から破門小勅書公表までの経過についてはわずかの資料(Opera II, 291-296)しかない。これさえ多くの研究で無視されている(A. BIONDI, "La doppia inchiesta sulle Conclusiones e la traversie romane di Pico nel 1487," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 197-212).

45) Dorez 113-117 (421-422).

正統信仰と不調和で異端にみえるもの、(二)正統か異端のどちらにも捉えられうるもの、(三)前代未聞の術語のゆえに不明瞭で欺瞞的なもの、に分け、調査のため委員会設置を宣言した。ピコの出頭も要請されたが第一回目の委員会にしか参加しなかった<sup>46)</sup>。そこで7つの提題についてピコに趣旨説明が求められ<sup>47)</sup>、3月6日には第1, 2, 7提題が異端と判定され、第4から6提題は異端の疑いを招くもの、第3はつまづかせるものと判断された<sup>48)</sup>。

3月10日に開かれた委員会には新しく6つの提題が提出された<sup>49)</sup>。翌日の日曜日、口頭もしくは文書での説明を要請されたピコはその日の夜あるいは翌12日の朝説明文を書いて提出したが、同日夜開催された委員会では聖体に関する最初の3提題が信仰に反する誤謬、残る提題は異端の疑いを招くものと判断された<sup>50)</sup>。

委員会の結論は答申としてイノケンティウス8世に提出されたが、約3ヶ月後の6月6日には新たな小勅書が出された<sup>51)</sup>。この中でイノケンティウス8世はこれまでの経緯を振り返ったうえ、ピコが教皇による最終判断を待たず「新たな文書」を著したこと、さらにこれも権威ある神学者から問題があるとされたことを理由に、先の調査委員会を異端裁判に切り替え、関連の諸規定どおりここに被告を召喚、逮捕、投獄し、有罪判決の場合には処罰の権限があることを確認した。ピコ自身裁判については何の情報も残していないので、おそらく召喚だけで済んだのだろう。いずれにせよ7月31日、ピコは7人の証人を前に、次の従順宣誓書に署名した。

「諸提題を教皇聖下と教皇聖下より公認された裁判官が判断なさるとおりのものとみなし、弾劾される提題を将来一つも支持しないことを私ジョヴァンニ・デラ・ミランドラは告白し、かつかかる意味において宣誓します。」<sup>52)</sup>

この宣誓にピコが署名した後、調査委員会と異端裁判両方の席でピコを

弁明し、3月12日の結論にも反対の記録を残した二人の神学者は反対を撤回する書類に署名した。一人は以前ピコを支持した理由を再確認するに留めたが、もう一人はピコ自身が誤りを認めたことを撤回の理由として詳述した<sup>53)</sup>。

このようにして異端裁判が完了した後、教皇の判断を公表すべき小勅書が作成された。その要は調査委員会の答申を承認する一方、900 提題全部冊の処分を命じ、所有、書写、印刷、なども禁止した。教皇署名の日付は1487年8月4日だが、実際発行されたのは同年12月15日のことであった<sup>54)</sup>。なぜ発行まで4ヶ月以上もかかったのだろう。情報を整理してみよう<sup>55)</sup>。

上述のとおり6月6日の小勅書でイノケンティウス8世が調査委員会を異端裁判に切り替えた理由は、ピコが教皇判断の公表を待たずに「新たな文書」を著したことであった。ジャンフランチェスコが『ピコ伝』で伝え

---

46) Dorez 119-126 (422-424).

47) 本文の中で個々の提題を挙げる暇がないのでここで各提題を翻訳し、最新の改訂版 (Farmer) における出典を示す。

1. 「トマスや通説が主張するようにキリストは実際に、またあるがままの状態、陰府に下ったわけではない。効果の形で [悪魔の力の破滅、人祖の救済など] のみ下ったのである」(提題第一巻 4>8=Farmer 426; cf. Sent. 3, d. 22, q. 2)。以下すべて第一巻。
2. 「限られた時間中の墮罪のため、時間的に無限の罰ではなく有限の罰のみが必要である」(4>20=Farmer 430; cf. Sent. 4, d. 46, q. 1, a. 3)。
3. 「キリストの十字架もいかなる聖像もトマスが容認する程度までも崇拜の仕方では敬はれるべきではない」(4>14=Farmer 428; cf. Sent. 3, d. 9, q. 1, a. 2)。
4. 「神が [受肉において] どのような本性をも受け入れることができたという [唯名論的] 神学者たちの通説には賛同しない」(4>13=Farmer 428)。
5. 「そう望むとき信条箇条が真であること、また、そう望むとき偽であることを信じるということは人間の自由能力のうちにはない」(10>18 cor. =Farmer 430)。
6. 「オリゲネスが地獄で罰せられるよりは救われたと信じることはもっと理にかなっている」(4>29=Farmer 434)。
7. 「マジックとカバラ以上にキリストの神性を確証する学はない」(9>7=Farmer 496)。

48) Dorez 126-131 (424-425).

49) Dorez 131-133 (425-426)。この資料には1-6の番号がついているが、ここでは上記提題の続きとして記す。



ている情報によれば、叔父はこの文書を「わずか20日の徹夜で」作成し、また『弁解』の題で公刊した<sup>56)</sup>。そうであればピコは問題とされた各提題については3月12日以降に長文の弁解を書き、公開討論の趣旨説明とともに手書きの形で公刊したことになる<sup>57)</sup>。大急ぎで原稿を作成したのは、教皇の判断に影響を与えようと目論んだためと考えられる。前述したとおり有力な調査委員2名が結論に反対したことを考えれば、その他にも教皇庁関係

- 
8. 「実体のうちに存在しないかぎり偶有性が存在しえぬという人も聖体の秘跡の真理を保つことができる。しかも通説どおりパンの実体が残らないという真理も保つことができる」(4>1=Farmer 422)。
  9. 「どの被造物も[受肉において神により]受け入れられるのが可能であったという通説が支持されるならば私の考えも成り立つ。すなわち、パンの変化もしくはパンの実体がなくなることなしにも聖体の秘跡の真理に則してキリストの体は祭壇の上に現存することができる。これは可能なことについての話であって、そうだという主張ではない」(4>2=Farmer 422)。
  10. 「聖変化のときに『これは私のからだである』云々と語られることばは、[司祭を]指示する意味においてではなく、実質の[キリストの言葉を唱える]意味として理解される(4>10=Farmer 426)。
  11. 「キリストの奇跡がその神性の最も確かな証拠であるのは、奇跡を行ったこと自体のためではなく、その仕方のためである」(9>8=Farmer 496)。
  12. 「神が知性であり、また知性をもつということは、魂が天使であるということ以上に不適切な話である」(3>49=Farmer 412)。
  13. 「魂は自己以外何も現実態として、また明瞭に認識しえない」(3>60=Farmer 418)。
- 50) Dorez 134-139 (426-427).
- 51) Dorez 144-146 (428-429).
- 52) Dorez 140 (427).
- 53) Dorez 141-144 (428).
- 54) Scritti 63-66.
- 55) A. BIONDI, "La doppia inchiesta," op. cit. 207-208 はいきなり小勅書発行とフランスへの逃亡に移るが、なぜ事件がそのような局面を迎えたか教えてくれない。筆者に知られている他の研究も同様である。
- 56) 『ピコ伝』は著作集(Opera I)の冒頭を飾るが頁数はついていない。この情報は2枚目の上から38-41行にある。改訂版(B. ANDREOLLI [ed.], *Joannis Pici Mirandulae viri omni disciplinarum genere consumatissimi vita, per Joannem Franciscum Illustris Principis Galeotti Pici filium conscripta*, Modena 1994)は手元にはない。
- 57) Opera I, 114-239. 趣旨説明(Opera I, 115-124)は講演の第二部(Opera I, 322-331)と合致する。

者の間にピコを支持、もしくは弁解した者もいたのだろう。だが、ピコなりに激しい調子で調査委員会の設置自体<sup>58)</sup>、その手続き<sup>59)</sup>、そして委員の見識<sup>60)</sup>を非難している。関係者の憤りが高まる中、イノケンティウス8世は異端裁判の開始を余儀なくされたのだろう<sup>61)</sup>。

これは7月31日の宣誓で完了したが、8月4日付の小勅書が直ちに発行されなかったのは、イノケンティウス8世がピコの宣誓でことを終わらせようと望んだからであろう。しかし『弁解』がついにナポリで活字印刷でも公刊されたことをイノケンティウス8世は裏切りと受け止め、ついに小勅書の発行を命じた<sup>62)</sup>。さらに、ナポリ版には「5月完了」の記述がついていた。これは原稿流布の時期としては正しいものの、印刷完了の時期としては明らかに偽りであった。2年後ロレンツォに送った手紙の中でピコはその経緯をこう振り返っている。

「教皇聖下の小勅書はローマで12月15日に公表されました。それ以前になかったことは全市が証言できます。私がそれを知ったのはフランス旅行中の翌年1月6日のことでした。そして〔小勅書の〕日付が8月〔4日〕であっても、発行されるまでは、私にも他の誰にもそれに従う義務はないと理解しています。」<sup>63)</sup>

---

58) Opera I, 124.

59) Opera I, 229-230.

60) Opera I, 168.

61) ピコの名誉回復のため長年教皇庁と交渉したフィレンツェ政府のローマ駐在大使ジョヴァンニ・ランフレディーノは、1489年8月27日、ロレンツォ・デ・メディチに送った報告書でイノケンティウス8世の立場をこう説明する。「異端の件以上に教皇聖下の立場を危うくするものはない。ご自身の意向はともかくとして、神学・聖書の専門家や枢機卿会議がご自分に示す判断に従わざるをえない。」こう指摘したうえ、イノケンティウス8世のことばを伝える。「この件は伯爵ジョヴァンニにとってよりも私にとって重大な問題であって、ロレンツォが前者に示す好意をみたら、私をも大切にしてくれるとは思えない」(Opera II, 293)。

62) ロレンツォ宛ての伝言はこう続く、「ピコのそれは大変重大な件で、〔枢機卿にあげるべき〕息子のことや、その他信仰が入らないことでロレンツォの便宜を図ることとはまったく別のことだ」(Opera II, 293-294)。

ここからも分かるように、ピコは小勅書の存在をおそらく内部情報から知っていた。なかなか出ないことを利用して、『弁解』の活字印刷に踏み切り、日付もさかのぼって5月完了と偽った。実際に印刷が完了したのは、小勅書が発行される少し前のことであったと思われる。以来、宣誓に反する『弁解』の活字印刷に加えて、偽りの日付は最大の問題であった。ピコは先の手紙で宣誓違反についてこう自己弁明する。

「諸提題を弁明しないことを誓ったのではなく、教皇聖下や彼ら〔調査委員会委員〕が判断なさるおりのものとみなすことを誓ったのです。そして委員の判断はすでに承知していたものの、第一義的に依存すべき教皇聖下の判断を確実には知りませんでした。委員の判断が教皇聖下によって承認されたことも小勅書を読むまでは知りませんでした。」<sup>64)</sup>

このようにかなりの詭弁を労して活字印刷での公刊を弁明しているが、第二点の日付については一度も触れていないことは、弁解の余地が無かったことを物語っている<sup>65)</sup>。

---

63) Opera II, 291-292 (1489年8月28日の手紙)。

64) Opera II, 292.

65) ランフレディーノがピコの自己弁明を教皇はじめ教皇庁関係者に伝えたところ、かえってマイナスに働いた。従来ピコの味方をしてきたウリスボーナ枢機卿もピコの姿勢をこう戒めた。「伯爵は問題点を知っていた。そしてそのことを口頭で言われたことで十分であったはずだ。……しかし小勅書が作られると分かった後、自分の書いたことを弁護するため『弁解』を著し、自らの諸提題を譲っていないことを示した。確かにそれら〔各提題についての教皇判断〕はまだ小勅書の形で公表されていなかった。これができたのはあの偽りの5月付の『弁解』が知られた後のことであった。」そういうわけで宣誓についてのピコの自己弁明は「教皇はじめ関係各位に伯爵が悪意で行動したと映った」(Opera II, 294)。

#### 4. 逃亡と再出発

反応を予想したか教皇庁内部から情報を受けたかはともかくとして、小勅書が逮捕令とともに発行されたとき、ピコはすでに逃亡していた。パリを目指したのは、おそらくパリ大学神学部の支持を得るためであった。グルノーブル近郊で逮捕されたものの、フランス国王シャルル8世の保護を受けて、実質的には自由の身で数ヶ月パリに滞在した。滞在中提題を一度も弁明しなかったとピコは力説したし<sup>66)</sup>、またそのとおりであったのだろう。なぜなら、その時点で逮捕令は有効だったしパリ駐在教皇大使も身柄の引渡しを要請しつづけていたからである。

シャルル8世やロレンツォの計らいでイタリアへの帰還が可能になり、1498年春以来、ピコはフィレンツェやフィエソレを拠点に研究や瞑想に専念した。しかし、公開討論などの行事にも参加した<sup>67)</sup>。また、とりわけ晩年にはフェラーラ近郊に所有していた別荘でも相当な時間を過ごした。因みにそこに住んでいた女性は最後まで噂の種となっていた<sup>68)</sup>。

教皇庁との対立、わけても相変わらぬ破門状態はピコにとって精神的重

---

66) Opera II, 292.

67) P. O. KRISTELLER, *Sources*, op. cit. 60; G. FIORAVANTI, op. cit. 157. 162; Farmer 138.

68) G. C. GAFFRAGNINI, "Savonarola tra Giovanni e Gianfrancesco Pico," G. C. GAFFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 254. ロレンツォはランフレディーノを通じてイノケンティウス8世に帰還後のピコの信心深い生活の様子を伝えたところ、こうした返事を受けた。「ロレンツォは自分自身をだましているのではないか。その気になれば、ご本人のかっただが、私はだまされないように注意する」(Opera II, 294)。ピコが亡くなった数日後の説教でサヴォナローラは亡き友人の魂がいま「煉獄にある」と述べた (L. FIRPO, *Gerolamo Savonarola: Prediche sopra Aggeo con il Trattato circa il reggimento e governo di Firenze*, Roma 1965, 104; E. SCHISTO (ed.), *Gianfranco Pico della Mirandola: Vita Hieronymi Savonarolae*, Firenze 1999, 123)。ジョヴァンニ・シニバルディはその理由をこう述べている。サヴォナローラは「伯爵ジョヴァンニにだまされた。……その死後、いろいろ明らかになった。とりわけ内縁の妻などについて」(G. C. GAFFRAGNINI, "Savonarola," op. cit. 254による引用)。

庄であったことは想像に難くない。こうした中、信仰生活の面で頼りになる相談相手を求め、若いときから尊敬していたドミニコ会士ジローラム・サヴォナローラの帰還を熱望していた<sup>69)</sup>。後者は1482年以降聖マルコ修道院に所属し聖書学を教えるかたわら、活発な説教活動を繰り広げ、1487年の春以来ボローニャを拠点に北イタリアの諸都市で教会・社会の抜本的な改革を呼びかける説教活動を行った。そのサヴォナローラがロレンツォの計らいでドミニコ会幹部から再び聖マルコ修道院に配属されたことはロレンツォの懐の深さを物語る。サヴォナローラはフィレンツェでの最初の説教をこう振り返っている。

「1490年8月1日の日曜日、私はわが聖マルコで公然と民に〔ヨハネの〕黙示録を解説しはじめた。そしてこの年ずっとフィレンツェで三つのことを民に告げた。一つ、今こそ教会は自己改革に取り組まなければならない。二つ、この改革に先だって、神はイタリア全土に大いなる禍を起すのであろう。三つ、これらのことは早くも起こるのであろう。」<sup>70)</sup>

もちろんサヴォナローラの現状批判はメディチ家の支配体制にも及んだが、臨終のときサヴォナローラがロレンツォに罪の許しを断ったという有名な噂には根拠がない<sup>71)</sup>。かえてロレンツォから側に召されたことは最後まで両者の関係が良好であったことを物語っている。対立について伝えられている情報はすべてジャンフランチェスコの『サヴォナローラ伝』1530年版に基づくもので、短文の1520年版は対立については何も述べていない。したがって、こうした情報はサヴォナローラ信奉者の間にでき上がっ

69) E. SCHISTO, op. cit. 121.

70) A. CRUCITTI (ed.), *G. Savonarola: Compendio di rivelazione e Dialogus de veritate prophetica*, Roma 1974, 9. 説教の反響については、E. SCHISTO, op. cit. 121 参照。

71) E. SCHISTO, op. cit. 122.

た話とみて間違いない<sup>72)</sup>。

1491年以降聖マルコ修道院の院長を務めていたサヴォナローラは、せめても自分の修道院で会則遵守に基づく改革を推進しようと、ロンバルディア管区からの自主独立を目指した。政治がらみの思惑もあったのだろうが、ロレンツォはずっと独立の企画を支持した。その後を継いだピエトロの計らいで1493年アレクサンダー6世は聖マルコ修道院はじめトスカーナのドミニコ会修道院を独自の管区に再編成し、しかもサヴォナローラをその長に任命した。

多くの人々と同様、ピコも個人の改心と教会・社会の改革を呼びかけていた説教家の影響を受けたのは当たり前であろう。しかしサヴォナローラの期待に反して、ピコはドミニコ会に入会するなどして世俗との絆を断ち切ることもなく、また思想の面でも独自の道を歩みつづけた。

サヴォナローラの帰還に先立つ1489年6月に、創世記1章の創造記事を題材にする主著『ヘタプルス』<sup>73)</sup>は完了し、学界で直ちに喝采を浴びた<sup>74)</sup>。しかし教皇庁ではそのためピコの評判はいっそう悪化した。『ヘタプルス』についての噂はすでに公刊前に教皇庁に伝わり、「相変わらぬ反抗心」と非難された。その情報を受けて、ピコはロレンツォに同年8月28日の手紙で「天と地が隔たるように『ヘタプルス』はあの諸提題の内容と異なる」<sup>75)</sup>と伝えた。ところが、フィレンツェ政府のローマ駐在大使ランフレディノはイノケンティウス8世の反応を「聖書学者が本書を調べたところ、これを弾劾した。なぜなら、多くの箇所において以前非難されたのと同じ異端

---

72) Ibid., 17-22.

73) ジャンフランチェスコもこれを叔父の主著として評価したので、著作集の最初に印刷させた (Opera I, 1-62)。これについては、C. TRINKHAUS, *In Our Image and Likeness. Humanity and Divinity in Italian Humanist Thought*, Chicago 1970, 507-526; id., “L’Hetaplus di Pico della Mirandola: compendio tematico e concordanza del suo pensiero,” G. C. GAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 105-125; F. ROULIER, op. cit. 202-285 参照。

74) 代表的な人文主義者の手紙は Opera I, 390-391, 393, 396-397 にある。

75) Opera II, 293.

主張を繰り広げているからである』<sup>76)</sup>と伝えている。これにロレンツォは、ピコが「たとえクレドを唱えたとしても、あの悪意の連中は異端だというに違いない」と憤慨した。「彼の不幸は教皇をたてにとる無知で悪意の人々の判断を仰がねばならないことだ」<sup>77)</sup>。実際にピコがスコラ学に関する諸提題で、トマス・アクイナスとヨハネス・ドゥン・スコトゥスのどちらにもさかのぼる流れを堂々と非難したことを考えれば<sup>78)</sup>、当時支配的であった学閥の中でピコに好意的な神学者は、とりわけローマでは少なかったであろう。

しかしローマの否定的反応は無知や悪意だけに起因したわけではない。『ヘタプルス』の中で、ピコはカバラの名称こそ用いていないが、その独特の言語・数字理解<sup>79)</sup>を前提に、創世記1章の創造記事を7巻に、また各巻を7章に分けて、宇宙における人間の地位とキリストの役割を説く。そういうわけで、人間の創造を主題化する第4巻は全体の中心を、幸福達成のために果たすキリストの役割を特筆する第7巻は全体の頂点をなす。また各巻の中で第4章と第7章も同様に位置づけられている。プラトンにさかのぼる伝承では、宇宙が英知界と感性界の二つに分かれているが、ピコはカバラの伝承に従って、知性的世界、天上の世界、地上の世界の三つに分ける一方<sup>80)</sup>、小宇宙に関する伝承に刺激されて<sup>81)</sup>、人間を第4の世界に数える。このすべては教皇庁関係の神学者にとって馴染めない話であったに違いない。

しかし、別な機会でもそうであったように、ここでも思想内容の面で主要案内役を果たしたのは、いつも言われる新プラトン主義でもカバラでもなく古代末期からピコの時代まで絶大な権威を有していたディオニシオス文書であった<sup>82)</sup>。

76) Opera II, 279.

77) Opera II, 279-280.

78) スコラ学に関わる提題について Farmer 218-249. 366-397 参照。弾劾された13提題のうち(上記注47, 49参照)、第1-3番目はトマス自身を、第4-5番目をドゥン・スコトゥスにさかのぼる唯名論を批判している。

## 5. フィチーノとの対決

ピコがはじめてフィレンツェに来たとき、当地の新プラトン主義は最高潮に達していたし、ピコもさっそくプロティノスの『エンネアデス』の研究に着手した<sup>83)</sup>。フィチーノは新プラトン主義をもとに神学と哲学、ひいては信仰と理性の調和を証明しようと努めた<sup>84)</sup>。ピコは早くもこうした試

---

79) 律法が神からの語り掛けでモーセに啓示されたのだから、ヘブライ語が神自身の言語だと考えられた。この発想はカバラの大前提である。これに古代・中世のキリスト教も共有していたもう一つの思想が加わる。それは文書の表面に留まってはならず、その裏に潜んでいる意味を探らなくてはならない、という比喩的釈義原理である。そのより深い意義を解き明かすため数字が案内役を果たすことができる。この考え方はライムンドゥス・ルールズ以来西方キリスト教の世界でも市民権を有していたが、古代のピタゴラス派は別にして、数字には人を天上の世界とつなぎ合わせるマジックの力があるというのは、当時のカバラに特殊固有の発想であった (C. WIRSZUBSKI, op. cit. 258-261; U. ECO, "I rapporti tra revolutio alphabetaria e Lullismo," G. C. CAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 13-28)。この発想はヘブライ語の22字が果たす二つの機能を前提とする。一つは a, b, c のごとくアルファベットの文字を表すことであり、いま一つは 1, 2, 3 のごとく数字を表すことである。そういうわけで、個々の単語や名称などは特定の数値をもつ。たとえば、神名ヤヴェ (JHVH) は4つの字からできており、各文字の数値 (J=10, H=5, V=6, H=5) を単純に足すと合計26の数値になる。また、この4つの間に可能なかぎりの組み合わせ (J=10, JH=15, JHV=21, JHVH=26) を足すと合計、あの聖なる72の数値になる。このような文字の組み合わせはゲオマントウリアと呼ばれる。ピコは『ヘタプルス』の付録 (Opera I, 59-62) で「はじめに」(創1:1) という開始句のうちに「世界と万物の創造の普遍的な理」を見出して、こう読解している。「子において、また子によって、父ははじめと終わらないし安息を創造した。よき契約による大人間の頭と火と基を」(Ibd. 60)。ローマの神学者たちにはそのような話が「またやったか」と写ったのも当たり前であろう。

80) C. WIRSZUBSKI, op. cit. 245-257.

81) E. COLOMER, op. cit. 281-302.

82) 上記注 31 参照。

83) 1484年、フィチーノは『エンネアデス』の翻訳に着手し、1492年に公刊した。ピコは『ヘタプルス』第5巻第5章でその公刊を予告している (Opera I, 37)。実際にフィチーノは翻訳の校正のためピコに原稿を随時提出していた (A. M. WOLTESS, "The First Draft of Ficino's Translation of Plotinos," G. C. CAFRAGNINI [ed.], *Marsilio Ficino e il ritorno di Platone I*, Firenze 1986, 307, 318)。

84) フィチーノについては上掲拙論「人間の尊厳」275-279頁。



みを空しいと判断した<sup>85)</sup>。

友人ジローラモ・ベニヴィエーニはおそらく1484年プラトンの『饗宴』を題材に『愛についてのカンツォーネ』を作り<sup>86)</sup>、ペルージャ滞在中のピコを訪れて注解を依頼した<sup>87)</sup>。これは「フィチーノに対する激しい批判」である一方、「新プラトン主義的概念構成の精密な分析」<sup>88)</sup>であり、新プラトン主義とキリスト教の基本的な違いを浮上させることが分析の狙いである。

確かに、唯神論は共通だが、ディオニシオス文書ははじめキリスト教神学者が、神がもろもろの天使を創造したと信じるのに対して、プロティエーノスはすべての権威あるプラトン注解者ととともに、神がただ一つの知性的存在者を生んだ、しかも時間のはじめにではなく時間を超えて永遠に生んだと考える。またプラトン主義者がこれを「神の子」と呼ぶのは事実だが、ディオニシオス文書ははじめキリスト教神学者が「神の子」と呼ぶ方は父なる神と同本質であり、プラトン主義者が「神の子」と呼ぶ知性的存在者は、神自身とは異質のものとみなされる。さらにフィチーノは個々の魂が神によって創造されると考えるのだが、これも、無からの創造や三位一体の秘儀と同様に信仰の事柄であって、新プラトン主義の根本思想に合わない。

このようにピコはすでに執筆活動当初よりフィチーノに対して批判的であったし、神学と哲学との、ひいては信仰と理性との区別を力説した。「前

85) そういった意味においてピコはフィチーノ流の新プラトン主義に対する16・17世紀の反発を先取りしていた(M. MUCILLO, *Platonismo, ermetismo e "prisca theologia"*, Firenze 1996, 195-289)。

86) Scritti 451.

87) これがはじめて1519年ベニヴィエーニの『饗宴注解』とともに公刊された(Scritti 10-18. 445-459; S. JAYNE, *Commentary on a canzone of Benivieni by Giovanni Pico della Mirandola*, New York-Berne-Frankfurt 1984)。手書きの文書は直ちに人文主義者の間に回り、反論が続出したのでベニヴィエーニは印刷を控えた。ジャンフランチェスコも遺稿の編集にあたって注解を無視した。他方ベニヴィエーニはサヴォナローラの影響で、本来のカンツォーネから異教的な要素をはずし、大いにピコの注解から抜粋しながら、自分の『饗宴注解』を書いた。だから業者がピコ自身の文書をも印刷したことははなはだ本意であった。

88) VG 145.

者は専らそれ自身によって正しい」ものの、後者においてはプラトンとアリストテレスまたは各々に由来する伝承に従うべきだと力説した<sup>89)</sup>。プラトンとアリストテレスの調和を証明することが一生の課題であったピコは、すでに 1482 年、バルバロに送った手紙の中でこう述べている。

「プラトンにおいて二つのことを評価しています。単なる散文を越えるあのホメロスの語り才能と、語られたことの意味深さ。この二つを注意深く考察すると、まったくアリストテレスと調和していることが分かります。こうして言葉だけをみるとこれ以上くいい違っているものはありませんが、事柄をみるとこれ以上調和するものもありません。」<sup>90)</sup>

ピコにとってこの調和は至極大事なことであった。なぜなら、教父を通じてプラトン、スコラ学を通じてアリストテレスが各々キリスト教伝承の一部となっていたからである。したがって、プラトンとアリストテレスが相容れないとの見解はキリスト教伝承そのものの一貫性を危うくする、というのがピコの立場であった<sup>91)</sup>。ところで、アリストテレスの著作は西欧の世界で 13 世紀以降よく知られていたのに対して、フィチーノの翻訳が出るまでプラトンの著作では『ティマイオス』と『パルメニデス』の一部しか知られていなかった。だから、フィレンツェ公会議を機に、プレートンが両者の対立を説いたとき、相当な反響を呼んだ<sup>92)</sup>。フィチーノがコジモ・デ・メディチからプラトン全対話篇の翻訳と引き換えに、1462 年フィレン

---

89) Scritti 465.

90) Opera I, 368-369. 2 年後に書かれた 900 提題の第 2 部はこう始まる。「自然あるいは神にかかわる問題のうち、言葉が異なるようにみえるにもかかわらず、プラトンとアリストテレスが調和しないものは一つもない」(1>1=Farmer 364)。

91) L. VALCKE, "L'itinerario filosofico di Giovanni Pico della Mirandola: fra libertà poetica e rigore scientifico," G. TARUGI, op. cit. 213-214.

92) プレートンについては上掲拙論「人間の尊厳」275 頁、さらに上記注 33 をも参照。

ツェ郊外のカレッジ別邸に活動空間を与えられたのも、プラトンとアリストテレスの比較をより容易にするためであった。

フィチーノ自身プラトンに賛同していた。しかし概念構成や陳述の明瞭さのゆえに、アリストテレスをプラトンへの予備校と位置づけた。プラトンの著作に手を付ける前にアリストテレス自身とその注解者を十分勉強するようピコに勧めたのも、そのためであった<sup>93)</sup>。しかしプラトンへの予備校といったフィチーノ流の調和説にピコは満足できなかった。なぜならフィチーノやそのサークルのように、プラトンに対してアリストテレスを降格させることは中世以来のキリスト教伝承を降格させることになり、結局キリスト教伝承そのものの一貫性を危うくする危険をはらむと考えていたからである<sup>94)</sup>。そういうわけで、『ヘタプルス』を完了すると、以後プラトンとアリストテレスの調和を証明することに専念した。破門状態は相変わらず続いていたが、ロレンツォの働きでローマとの悶着も何とか収まり、少しゆとりもできたようだ。1490年3月24日、パッティスタ・スパンニョーリに送った手紙で、日々の生活をこう報告している。

「懸命に『プラトンとアリストテレスの調和』を執筆している最中です。毎日、午前中をこれに充てています。午後は友人[との交際]と健康管理のために使い、またその間に詩人や講演者[の文書]を読み、時にはより軽い雑学を楽しみます。夜は睡眠したり、聖書を読んだりして過ごします。」<sup>95)</sup>

1491年の秋頃、フィチーノのサークルで行なわれた討論会がそれまでの

93) Opera I, 373.

94) ルイ・ヴァルケもこの点を正しく力説するのだが(上記注91)、900提題を書いた時点で、アリストテレスをプラトンに還元する形で両者の調和を証明しようとしたかはともかくとして、最終的には逆の戦略をとったという結論には賛同できない(L. VALCKE, "Giovanni Pico della Mirandola e il ritorno ad Aristotele," G. C. GAFRAGNINI, *Pico*, op. cit. 327-349)。

研究成果を発表する機会を与えた。同年、友人アンジェロ・ポリツィアーニがアリストテレスの『ニーコマコス倫理学』の注解を著したこともあって、彼にその討論会の席で“俗”ときめつけられたアリストテレスを、ロレンツォには“聖”と敬われていたプラトンを代弁する役割が与えられた。プラトン主義あるいはより正確にいうなら新プラトン主義が圧倒的に優勢だった会合について後日ポリツィアーニはピコに報告し、「アリストテレスが恩師プラトンに同意することをどのように弁護できるか」<sup>95)</sup>と尋ねた。口頭での答弁に満足できなかったピコは友人に原稿を送り、最大の問題は存在と一者との関係であったので、これを題目にした<sup>97)</sup>。

一者が絶対優位であるという考えは、プロティノス以来新プラトン主義の根本主張であった<sup>98)</sup>。アリストテレスは存在を一者と同等とみなしたのに対し<sup>99)</sup>、プラトンは『パルメニデス』においてのみ明確に一者の優位を説いた<sup>100)</sup>。しかしピコが正しく指摘するように、この対話篇は積極的にプラトン自身の教説を解くよりは、むしろ弁証法的思考能力の鍛錬を目的としている。そういうわけで『パルメニデス』だけを典拠に、アリストテレスが恩師に対立していると考えるのは謬論にほかならないとピコはまず力説する<sup>101)</sup>。

問題の核心は神をどう捉えるかということである。新プラトン主義の伝承では「最高に単純である神は一者であって、それゆえ存在者ではない」と言われている<sup>102)</sup>。つまり、神はあれ、これというような存在者(ens)で

---

95) Opera I, 359. プラトンとアリストテレスの調和については原稿の一部、もしくは要約しか残っていない(注97参照)。ピコの死後3年間も遺稿をほしのままに利用しえたジャンフランチェスコはピコの意向とは正反対に、遺稿をあらゆる異教哲学を論駁するために盗作したようである(Farmer 152-172, 特に163-164)。

96) Opera I, 241.

97) De ente et uno (Opera I, 241-256=VG 273-316)。以下EUと記す。ヴァルケとガロアは翻訳の中でもその前の論述でもディオニシオス文書の影響を十分評価していない(VG 152-160)。講演の翻訳も論述(VG 169-225)も同様である。

98) Enneades V, 5, c. 6, l. 11. これについてVG 153参照。

99) Met IV, 2, 1003b; XI, 3, 1061a. これについてVG 276参照

100) Parmenides 137c-142b.

はなく、まさしく存在(esse)それ自身である。これは新プラトン主義伝承の核心であり、フィチーノ等はこれを全然把握していない。ピコによれば、新プラトン主義者はディオニシオス文書の影響で一貫して神の不可知性を力説してきた。そして神がただの存在者ではなく、まさしく存在それ自身である、という見方でプラトンとアリストテレスも一致している。フィチーノのサークルでは存在者と存在が混同されるのだから、「俗なるアリストテレス」が神について敬虔に語る恩師プラトンに対立しているとはまったく勝手な言い種である<sup>103)</sup>。

ピコは「神が存在者ではない」という主張に賛同し、かつどの名称も神の秘儀を十分に表現できないことを力説するため、ディオニシオス文書を引用する形で、「神は神でもない」<sup>104)</sup>とまで書いた。これは以前世話になっていた医師兼哲学者であるアントニオ・チタヴィーニとの論争のきっかけとなった<sup>105)</sup>。彼は矛盾律をかかげ、偏狭なスコラ学の立場からピコを攻撃したが、それに応えて、ピコは専らプラトン主義の伝承を弁解する立場を強いられた。二番目の手紙までは、ピコは多少の皮肉も混ぜたもののでいねいに答えたが、三番目の手紙でも相変わらず批判が繰り返されているこ

101) 対話篇に登場するソクラテス、バルメニデス、ゼノン間のやりとりの発端(126 a-127 c)、問題設定(127 e-135 c)、バルメニデスの命題(135 d-137 b)とその論証をめぐる議論(137 c-166 c)「を読んでみると、どこにも何か主張されることなく、どこでもただ問われていることが分かる」(EU 2 [Opera I, 243=VG 284])。『バルメニデス』に加えて『ソフィスタイ』も一者優位説を支える典拠として引き合いに出されたが、プラトンはここで「非一者」には「非存在(無)」、または「一者」に「何か」を対立させており(Sophistes 237d. 238a. c)、したがってアリストテレスと同様、一者と存在を同等に扱う。

102) EU 1 (Opera I, 241=VG 276)。この主張はディオニシオス文書にもみられる(De Theologia Mystica 5=PTS 36, 150 : 2=PG 3, 1048 A)。

103) アリストテレスは存在と善の同一性を論じたうえ、ホメロス(Iliades XVI, 204)を引用しながら、軍の上に司令官がいるごとく、もろもろの善の上に最高善があると明確に述べている(Met. XII, 10, 1975a)。「アリストテレスはどこが間違っているのか。どこがプラトンと食い違っているのか。どこが俗なのか。どこが神について十分敬虔に考えていないのか」(EU 4 [Opera I, 246=VG 295])。

104) EU 5 (Opera I, 248=VG 300-301; De Theologia Mystica 5=PTS 36, 149: 8)

105) Opera I, 265-288。

とに苛立ちを隠せず、「お忙しいあなたが閑人でもない私に従事させているこれらのすべては、取るに足りない問題だ」<sup>106)</sup>と書いた。特にディオニシオス文書を称賛しながらもピコの引用した部分について自己の見識を述べていないことはピコを怒らせた。四番目の手紙にはジャンフランチェスコが答えており、亡くなった叔父が本来の「貞潔に戻らなかったこと」までも本人に代わって謝罪している<sup>107)</sup>。

## 6. 終わりなき最期

フィチーノは「あの不思議な青年」<sup>108)</sup>が自分にぶつけた挑戦を最後まで許すことができなかった<sup>109)</sup>。他方、ロレンツォは著書が著わされた数ヵ月後にポリツィアーニとピコに見守られて43歳の生涯を閉じた<sup>110)</sup>。1492年4月8日のことである。ロレンツォは問題発生以来ピコのため教皇庁と交渉し続けてきた。そのおかげで破門こそ解消されなかったものの、いっそう厳しい措置は阻止された。イノケンティウス8世にとって最大の問題で

---

106) Opera I, 281.

107) Opera I, 288. ピコが終生新プラトン主義の根本主張を弁明したことは、ヴァルケの還元説(上記注94参照)に合わない。

108) 「あれほど自信満々で、自らの指導者に挑戦して、かつ全プラトン主義者の教説に逆らって、神的バルメリデスがただの論理者にすぎず、プラトン自身もアリストテレスと同様、一と善を存在と同一視したと主張する前に、あの不思議な青年に[諸先輩の] 討論や論述をより賢明に検討してもらいたかった」(Scritti 37)。

109) パリ大学総長ジュルメーン・デ・ガナイに送った手紙で、フィチーノはピコ逝去の詳細を報告するとともに、「年齢では私の息子であり、親密感では弟であった」ピコの著作をこう評価する。「すべてを雄弁にかつ繊細に論述した一方、華美な文体や彼自身もほとんど分からないはずの新奇で不明瞭な表現ですべてを曖昧にしていました。そういうわけで、彼自身本気でそう考えたはずもありませんし、他人も強引に占わないかぎり、彼の書いた文書を解くことはできません。しかも、できてそこまでやってもらいたくありません」(Opera I, 406)。ジャンフランチェスコがこの手紙を叔父の著作集に収めたのは、自分の「敬虔な編集活動」がその手紙の中で称賛されているからであろう。

110) ロレンツォ自身ピコを呼び、三人で語った後、息を引き取った様子をポリツィアーニは詳述している (Opera II, 284-285)。

あったのは、ピコが『弁解』を活字印刷で公刊したことを教皇令違反と認め、そのための許しを乞い願うことを拒否しつづけてきたことであった。

1492年7月25日、イノケンティウス8世が亡くなり、二週間後に後任に選ばれたアレクサンダー6世はもとよりピコに好意的であったこともあって、1493年6月28日に無罪を宣言する小勅書を発行した<sup>111)</sup>。これによって6年間も担ってきた重荷がピコの肩から下ろされたが、1494年9月24日、親友ポリツィアーニが亡くなり、数週間後ピコも猛烈な熱病に襲われていっさいの治療が利かなかった。それを聞いたシャルル8世は駐在先のピザから親書を携えさせ2名の侍医をピコの病床に送ったが、フランス軍がフィレンツェにたどり着いたその日にピコの息は絶えた。

この偶然はフィチーノにとって重大な変わり目の象徴と映ったが<sup>112)</sup>、それは彼だけではなかったろう。実際、ピコの死後10日の間にフィレンツェの政治は一変した。フランス軍の侵攻に対して無抵抗のままピザはじめ城塞諸都市を明け渡したうえ、フィレンツェ城外の野営場でシャルル8世との交渉に臨んだピエトロ・デ・メディチは財政・軍事両面においてあまりにも譲歩したため、市民の間で大規模な反乱が起き、ピエトロは逃亡を余儀なくされた。しかし新政権のあり方をめぐって直ちに対立が起り、フランス軍の入城に伴って流血の恐れもあったため、サヴォナローラは事態を何とか収めようと説教し、またシャルル8世と直接会って、フランス軍によるフィレンツェの略奪をくい止めた。

サヴォナローラはすでに1485年以來ずっと改革に先立つ禍について説教してきたし、フランス軍がアルプスを越えてジェノバに入城したことを聞いて、1494年9月21日には大勢の聴取を前に新たな洪水の審判を予告し、また、バビロン捕囚を終わらせ、ユダヤ教の改革を許したペルシャ王

111) Opera II, 285-287. ベセル版(1601年)以来、この小勅書はすべての著作集の冒頭を飾っている。即位直後(1492年8月16日)ピコは新教皇にお祝いの手紙を送った(Opera II, 389-390)。

112) Opera I, 405.

キュロスに比してシャルル8世を新たな宗教改革を可能にする第二のキュロスと呼んだ<sup>113)</sup>。ピコと同様、ブォナルローティ・ミケランジェロもこの説教を聞いて、フィレンツェを逃れた。そして30数年後もこれを忘れず、システーナ聖堂正面の壁面に最後の審判を描いた時には洪水のモチーフを選んだ<sup>114)</sup>。同時代人にとってあれほど画期的な出来事であったことを考えれば、サヴォナローラもフランス軍の侵入で自らの預言が成就したと確信していたに違いない。しかも彼の力で略奪が避けられ、到着後10日間でフランス軍が南下を続けたことで彼の人気は頂点に達した<sup>115)</sup>。

サヴォナローラの主導のもとで事態は収まり、年末までに社会下層部にも発言権を認める共和制憲法が採択された。しかし、以降フィレンツェの市民と市政はサヴォナローラの指導を仰ぐピアンニョーニ（泣き虫派）とメディチ家を支持するアラビアティ（立腹派）に分かれた。市政の中で前者の優位が続くかぎりサヴォナローラは自らの修道院をはじめ教会・社会の改革を順調に進めることができた。しかしアラビアティ勢力が次第に増大していった。これには教皇の思惑も影響している<sup>116)</sup>。

サヴォナローラはシャルル8世の到来を預言の成就と大いに歓迎したが、それとは正反対に、アレクサンダー6世はこれを教皇領はじめイタリアへの干渉と受け止めた。狙いはナポリ王国の王位を手に入れることであつたが、それを正当化するため、シャルル8世はナポリを拠点に久しく待ち焦がれていた反オスマン・トルコ十字軍を編成し、コンスタンティノポリス奪回が容易になるという建前を掲げた。教皇はそれを相手にせず、何とかしてフランスに立ち向かうため、イタリア諸都市同盟を結成させようと必死であつた。しかしサヴォナローラの力がこのまま続けば、フィレンツェが同盟に参加しないことは確実だったので、アラビアティの情報に

---

113) R. RIDOLFI, *Vita di Girolamo Savonarola I*, Roma 1952, 66-80.

114) *Ibid.* 116-126.

115) E. SCHISTO, *op. cit.* 122-123.

116) これについては、A. SMOLINSKY, *Die Geschichte des Christentums 7: Von der Reform zur Reformation*, Freiburg-Basel-Wien 1995, 157-158 参照。



も助けられて、1495年10月14日の小勅書でサヴォナローラに説教を禁じた。しかし4ヵ月後にはサヴォナローラは説教活動を再開し、以来、教皇庁を終末時の「大淫婦」(黙17:2, 15, 16; 19:2参照)とする批判を繰り広げた。これを受けたアレクサンダー6世はまずサヴォナローラの管轄下にあるドミニコ会トスカーナ管区を解散させ(1496年7月11日)、ついにサヴォナローラを破門した(1497年5月13日)。また翌年3月上旬のフィレンツェ領における聖務停止の予告は、フィレンツェ貿易の障害になり、ジェノバ、ベネチアなどの商人の喜ぶところとなった。結局、市政の中でもサヴォナローラ追随者の声か商人の声かのどちらを聞くかということになり、サヴォナローラの影響は一気に衰えた。サヴォナローラの預言が真か偽かを判断すべく、火による神判が予定されたが関係者の対立や雨で中止になった(4月7日)。翌日、群集が聖マルコ修道院に進入し、サヴォナローラは2名の同僚とともに逮捕された<sup>117)</sup>。拷問にかけられて、自ら立件どおりの偽預言者であると供述したが、直ちに撤回した。それでも供述は死刑判決の理由として記録に残り、同年5月23日、3人は大勢の観客の前に火刑に処せられ、その灰はアルノ川に撒かれた<sup>118)</sup>。

以上の経緯を概要した理由は、サヴォナローラの役割がピコの著作集公刊と後代のイメージに深く関わるからである。サヴォナローラ自身とは直接関係なしに、1490年以来フェラーラを中心に占星術をめぐる激しい論争が交わされた。ピコもこれに加わり、長文の『占星術駁論』を執筆する最中、熱病で倒れた<sup>119)</sup>。遺言にはローマでピコの弁明にも努めた兄のアントンマリアが動産の相続人と定められていた<sup>120)</sup>。代理人がピコの著作や蔵書を受け取った時点ではそれらは聖マルコ修道院に保管されていたが、そこから枢機卿ドメニコ・グリマーニに売られ、彼を経由してついにヴァ

117) E. SCHISTO, op. cit. 143-144.

118) Ibid. 145-150.

119) Opera I, 414-731. ピコの役割については、G. G. FIORAVANTI, op. cit. 163-172参照。

120) 遺言について Farmer 153参照。

ティカン図書館に入った。ピコの死後、書籍がずっと聖マルコ修道院に保管されていたかはともかくとして、ジャンフランチェスコは叔父の死後3年間遺稿をほしいままに利用しえた。その間にサヴォナローラとも交際があったことは確実である<sup>121)</sup>。

ジャンフランチェスコはもう一人の熱烈なサヴォナローラ派で自らの侍医を務めるジョヴァンニ・マイナルディに助けられて1495年2月までに『占星術駁論』を印刷のために書き写し、1496年夏、すなわち没後わずか20ヶ月以内にピコの著作集2巻をボローニャの印刷所から公刊した。これはその後の全著作集のもととなっている。第1巻の冒頭に、ジャンフランチェスコによる叔父の伝記があり、『ヘタプルス』『弁解』『講演』『存在と一者について』『書簡』、第2巻には『占星術駁論』が載っている<sup>122)</sup>。ほぼ同時にサヴォナローラは『占星術駁論』をもとにイタリア語で一般向け概要を著わし、その中で盛んに「時代最大の哲学者たるピコ」の権威を引き合いに出す<sup>123)</sup>。こう見てくると、サヴォナローラとピコ著作集編集者には利害が共通していたことが分かる。それは、ピコの権威をもって占星術の空しさと預言的カリスマの独自性を力説することにあつた。そのため信仰者たるピコの潔癖性を強調せねばならない。ピコ自身の作と思われぬ『主の祈り注解』『キリスト教生活の12規則』などが著作集に織り込まれたのもそのためである<sup>124)</sup>。

アラビアティは偽預言者や異端者のフィレンツェ登場を予告した星占いを引き合いに出し、また預言よりは占星術こそ未来を予知するのに役立つとの論理を繰り広げた。他方、ピコは天体の一般的な影響を認めながらも

---

121) 以下について Farmer 151-179.

122) ジャンフランチェスコが載せなかったのは『900 提題』『詩篇注解』『プラトンとアリストテレスの調和』『愛のカンツォーネの注解』そして『カバラ文書』である (Farmer 163-164)。

123) G. C. GARFAGNINI/E. GARIN (edd.), *Girolamo Savonarola: Trattato contro gli astrologi*, Roma 1982.

124) Opera I, 332-340. 偽造性については, Farmer 170-171 参照。

個々の出来事、わけても自由意志に関わる人間の行動にはいっさいの影響がないと詳細にわたって論述することによって、占星術の根幹を断ち切った。そのうえピコは占星術というみせかけの自然科学に対して、預言の宗教的カリスマ性を弁明した。

こうみてくると、アラビアティとの対決において一刻も早くピコの著作を利用できることはサヴォナローラはじめピアンニョーニにとって至極大事であったことがわかる。実際多くのアラビアティもピコを尊敬していた。だからこそ晩年のピコはあまりにもサヴォナローラにとらわれ、その影響で『占星術駁論』を書いたとの噂も広まった<sup>125)</sup>。確かに現行の『占星術駁論』は以前ピコにとって大きな関心事であったピタゴラス派<sup>126)</sup>とカバラ<sup>127)</sup>を非難し、かつてカルディア神学者に興味をもっていたことに謝罪の意を表明する<sup>128)</sup>。サヴォナローラの影響があったとすればこうしたところにみられる。しかしジャンフランチェスコが遺稿を訂正したことも考えられなくはない。いずれにせよ『占星術駁論』が力説する学問的知識と信仰上の真理との本質的相違は青年期以来ピコの根本主張であった。そのうえピコはすでに『ヘタプルス』の中で、したがってサヴォナローラとの交際が始まる前に占星術を論駁している<sup>129)</sup>。

ピコがサヴォナローラの政治活動をどう評価したのかを知るすべはない。自らはなほだ非政治的だったピコが、ついに、サヴォナローラの引き起こした運動の象徴となったことは歴史の皮肉であろう。聖マルコ修道院においてピコ、ベニヴィエーニとポリツィアーニの墓は隣接している。そして、その前にサヴォナローラの立像が建っている。

125) 出典については Farmer 173, n. 111 参照。

126) Opera I, 554.

127) Opera I, 654-656.

128) Opera I, 719. 注 33 参照。

129) Hetaplus I, 5 (Opera I, 15); II, 7 (Opera I, 22); V, 4 (Opera I, 37).

## 7. 結び

サヴォナローラとジャンフランチェスコのように、多くの近代人はピコ  
の思想のうちに各々自分自身にとって最大の関心であったものを発見し  
た。理由の一つは、その思想の幅広さ、もう一つはその未完結性であつた  
ろう。だからこそ、ピコの思想は人間の尊厳、諸宗教・諸哲学の調和、宇  
宙の科学的観察などなどについて、多くの近代人に種々多様な示唆を与え  
ることができた。そういった意味において、ピコの思想はピコ自身がたま  
たま考えたり、意図したことに尽きるわけではない。その思想が引き起こ  
した新しい発想にも及んでいる。ハンス＝ゲオルク・ガダマーはこれを「作  
用史」(Wirkungsgeschichte)の原理と呼んだ。すなわち、一定の歴史的事  
象はその後に生起する歴史に働きかけ、後代人がその事象を理解する地平  
を形成する。それゆえ、歴史的事象を理解することは、過去のデータと現  
在の関心との間に起きる「地平融合」(Horizontverschmelzung)として成  
り立つ<sup>130)</sup>。まさに、こうした地平融合の結果、ブルクハルト以降のピコ像  
が出来上がった。科学的姿勢や人間中心主義が近代の特色であるならば、  
ピコは近代人とさえ言い難い。しかし多くの近代人はその思想のうちに、  
人間をあらゆる他律から解放すべき示唆を発見した。そういった意味にお  
いて、ピコは意に反して近代の象徴となった。この結論を裏づけるにはいっ  
そうの資料研究が必要なので、ここではその方向性だけを指摘しておこう。

---

130) H. G. GADAMER, *Wahrheit und Methode*, Tübingen 41975, 284-290. 356-360.

## Paradoxical Symbol of Modernity

Giovanni Pico della Mirandola

Hans Jürgen MARX

This paper attempts to show that, in spite of recent questioning, it is still legitimate to regard Pico as a symbol of modernity, even though he himself was not modern in the general sense of the term. A brief review of the relevant research is followed by an analysis of the intent and process that led Pico to write his *Nine hundred Conclusions* and the *Speech on Human Dignity*. Then, it is shown why and in what order of events the publication of his *Apology* led to Pico's condemnation by Innocence VIII. This reconstruction is followed by an analysis of Pico's relationship with Savonarola and Ficino, showing that he was quite independent of either one. The circumstances surrounding the publication of his posthumous works show that Pico was used by Savonarola and his cycle as a symbol of their movement. And a symbol he has remained for many since then.